

|         |   |
|---------|---|
| 氏名      | 村岡 聡介   |
| 授与した学位  | 博士  |
| 専攻分野の名称 | 医学  |
| 学位授与番号  | 博 甲第 6453 号   |
| 学位授与の日付 | 2021 年 9 月 24 日   |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻<br>(学位規則第 4 条第 1 項該当)   |
| 学位論文題目  | Assessment of the Concordance Rate between Intraoperative Pathological Diagnosis and the Final Pathological Diagnosis of Spinal Cord Tumors<br>(脊髄腫瘍における術中病理診断と最終病理診断の一致率の検討) |
| 論文審査委員  | 教授 吉野 正      教授 柳井広之      准教授 安原隆雄  |

#### 学位論文内容の要旨

術中病理診断は脊髄腫瘍の手術治療を決定する上で重要な役割を果たす。ただし、最終病理診断は術中病理診断と異なる場合がある。この研究の目的は、脊髄腫瘍における最終病理診断と術中病理診断の正確性を検討することである。当院で脊髄腫瘍の手術を行った 108 例を後ろ向きに検討し、術中病理診断、最終病理診断、不一致症例、術中病理診断と最終病理診断の一致率について調べた。術中病理診断と最終病理診断の不一致症例は 5 例であった。腫瘍全体の一致率は 95.4%であり、硬膜外腫瘍が 90.9%、硬膜内髄外腫瘍が 98.5%、髄内腫瘍が 84.2%、ダンベル型腫瘍が 100%であった。髄内腫瘍の一致率は他の腫瘍よりも低い傾向であった (P=0.096)。術中病理診断は術中に治療方針を決める上できわめて重要な方法であるが、術者は術中病理診断の限界を認識し、身体所見、画像所見、術中所見なども含めて包括的に治療方針を決める必要がある。

#### 論文審査結果の要旨

本研究は脊髄腫瘍の術中病理診断について検討したものである。108 例の岡山大学病院での手術例を術中病理診断と最終病理診断とを比較し、不一致症例を検討し、両者の一致率を算出した。その結果、術中病理診断と最終病理診断が不一致だったのは 5 例であった。腫瘍全体の一致率は 95.4%であった。硬膜外腫瘍が 90.9%、硬膜内髄外腫瘍が 98.5%、髄内腫瘍が 84.2%、ダンベル型腫瘍では 100%一致していた。髄内腫瘍は他の腫瘍より低い傾向があった。

実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、脊髄腫瘍の診断に関する重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。